

4 瓦・土管・味噌溜醸造業を振興、新川町発展にも尽力

角谷安兵衛(三代目) (1840~1919/中央)



1 「稲安」の家に三代目安兵衛として生まれる

角谷安兵衛は、天保11年(1840)1月2日、大浜村道場山にて、二代目安兵衛の長男として生まれた。幼名を弥三郎、保平といい、後に三代目安兵衛となった。生家は享和元年(1801)に浜尾の稲荷山で瓦製造を始め、「稲安」として知られていた。

弘化3年(1846)、6歳で浜尾の高橋文亮の寺子屋で学ぶようになった。そして、嘉永5年(1852)より家業に従事した。そのとき安兵衛は12歳であった。安兵衛が経営の中心になるようになった慶応元年(1865)より、「稲安」は味噌、醤油醸造も合わせて行うようになった。

2 新民序の使丁として、鷲塚騒動に銃を持って駆けつける

明治3年(1870)に大浜陣屋内の士族階級の学校、日新館(翌明治4年2月に新民序が出来る)の付属使丁(仕丁とも、小使い、用務員)となった。

明治4年(1871)、鷲塚騒動(廃仏毀釈に端を発した浄土真宗門徒と菊間藩の役人との争い)の際には、31歳になった安兵衛は、これを収めるために種子島銃を持って新民序まで駆けつけたという。

3 大浜村分村問題、北大浜村の初代戸長として解決に尽力

明治9年(1876)、安兵衛は36歳で大浜村改組取調係に就任した。その後5年程した明治14年(1881)頃から大浜村では北部の有力者である板倉玄四郎らを中心に分村計画が進められた。翌明治15年(1882)になって岡本坂太郎(当時29歳で上組取締兼土木係・弟の小次郎は、服部長七の大番頭)他894人が愛知県令国貞廉平に「分村願」を提出した。その理由は次のようであった。

- ① 大浜村は、地形が南北2里余あり、土地の事情が違い、互いにそれぞれの土地事情に暗く、戸長1人、役場一ヶ所では不便不都合である。
- ② 南部は漁業及び商業が多く、北部は工業及び農業が多く、それぞれ利害が一致しない。
- ③ 村会議員の人員は、戸数の差によって南部に多く、北部に少ない。それに反して、村費の負担は北部に多く南部に少ない。南部は常に土木営繕を主張し、北部は節約を主張している。これは南部が依頼心を持っているからだ。

しかし、この「分村願」はすぐに「詮議及び難し」として返された。このように難儀を極めた分村問題は、岡本坂太郎や市古良策(当時33歳で漢方医の息子、後に春平と改名、自由党员。村会議員の岡本八右衛門と緊密な連絡をとった)らの献身的な努力によって3年の年月を経た明治16年(1883)にその目的を達成した。ここに大浜村は、大浜村(南大浜村)と北大浜村に分村された。

ちょうどこの年11月、角谷安兵衛は北大浜村の初代戸長となった。ただ、安兵衛が戸長になったその後も、神社や地所、土木費や村費などの諸問題でいざこざが絶えなかった。それについて愛知県令の諭達があり、これに基づいて北大浜村でも明治19年(1886)2月29日に臨時村会を開いて「今般御諭達ヲ拝承シ、両村和熟誓約書」を作成・決議した。大浜村戸長の石川八郎治、北大浜村戸長の安兵衛と、

碧海郡長市川一貫県令代理に奥書をもって提出した。そしてこの「分村願い」は、同年3月31日に聞き届けられ、大浜村の分村問題はやっとな解決するに至った。

明治22年(1889)、安兵衛は50歳で北大浜村村長に就任、後碧海郡会議員や参事会員になった。なお北大浜村は、北棚尾村との合併を経て、明治25年(1892)より新川町に改称された。

4 土管業「三陶組」を引き継ぎ、巨額の利益をあげる

明治20年(1887)、まだ北大浜村といていた頃、安兵衛は、岡本八右衛門、亀山竹四郎、服部長七と共に、共同で「三陶組(土管製造)」を設立し、市場に進出して常滑土管に挑戦した。

当時、新橋鉄道局が線路敷設のため、多量の土管を購入することになったので、三陶組は見本を提出して、採用を請願した。ところが常滑の業者は、地場産業の販路独占のため、三陶組は堅牢さに欠けると誹謗した。これに黙ってはおられず、服部長七の東京支店長泰鍬治郎名義で、農商務省(通商)に分析を申請した。その結果、焼成熟度は強く、質は堅硬緻密であることが証明され、以後鉄道局は多額の三陶組製品を購入し、三陶組の名が高まった。

加藤平五郎(新川出身の北海道由仁町開拓者)との縁もあり、北海道へ売り込みをしたが、いろいろな障害のため交渉がまとまらず、土管が長期間厳冬の風雪にさらされて品質が低下、多額の損害を出した。そのため三陶組は、明治27年(1894)6月に解散した。

しかし、解散した三陶組を安兵衛は引き受け、単独で事業を継続した。幸運にも日清戦争後、各種の事業が勃興する機会に恵まれ、需要が供給を上回る好況が到来した。なかでも山陽鉄道の土管は、ほとんど安兵衛が納入し、年商3万円の巨額に達した。安兵衛の土管の優秀さは、九州鉄道、東北鉄道の納入にも成功した。

明治31年(1898)頃から隣接地で同業者も製造を始めるようになった。明治37年(1904)、安兵衛は味噌溜醸造業に専念するため、土管部門のすべてを太田喜太郎と吉田福太郎に譲渡した。

5 瓦製造振興にも努め、数々の公職に就き、新川町発展のために尽力

明治31年(1898)に新川町収入役に就任、以後数々の職務に就いた。その役職と就任当初の年齢を挙げてみる。新川町奨励慈善会々長(60歳)、新川町会議員(61歳)、新川町商工会長(63歳)、新川町助役(71歳)、新川町学務委員(74歳)等である。

また、明治43年(1910)、安兵衛が70歳のとき、西三瓦製造同業組合が創立され、その人望から安兵衛は組合長に選ばれ、瓦製造業の振興にも力を尽くした。

大正3年(1914)には、74歳の高齢でありながら新川町学務委員に選ばれた。晩年は新川町奨励慈善会の会長として、広く町民の徳育分野にも奉仕した。

大正8年(1919)3月26日、79歳で死去した。

新川羽久手グランド奥にある新川神社には、新川出身の偉人である服部長七(人造石を発明した土木の神様)、岡本兵松(都築弥厚の明治用水プランを実現させた苦節の碧南人)と共に大人命として祀られている。(昭和2年創建)

また、昭和25年(1950)から昭和30年(1956)まで藤井達吉が碧南市道場山に住まいしたことは周知の通りであるが、その住まいは角谷安兵衛家所有のものであったことも有名な話である。

◆もっと知りたいなら

- ・『岡本八右衛門の時代』(平7加藤良平著)
- ・『碧海郡新川町上』(平5加藤良平著)
- ・『碧南市史 第2巻』(昭45市史編纂会)